

2020年3月22日

福音書からのメッセージ

弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

(ヨハネによる福音書9章2節)

今日の福音書には、まず生まれつき目の見えない人が登場します。事故や病気で目が見えなくなったのではなく、生まれてからずっと見えたことがない人。その人のことを、世間はどのように見ていたのでしょうか。

弟子たちはイエス様に尋ねます。「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と。さらに最後の方には、ファリサイ派の人たちのこんな言葉が書かれています。「お前は全く罪の中に生まれたのに」。

生まれつき目が見えないことと罪とが、結ばれている。それがこの時代のいわば常識でした。そこには何の疑いもありませんでした。だから弟子たちは、罪を犯したからこうなったという前提で、「だれが？」と問いかけるのです。これらの言葉の裏には、「自分は違う」、「わたしは罪人ではない」という思いが見え隠れしています。

そもそも「罪」とは何なのでしょう。「罪」とは「的外れ」ということを意味します。自分では神さまの方を向いているようでも、きちんと向けていない、そういうことです。実は的外れなのは、生まれつき目が見えない人ではなく、弟子たちやファリサイ派なのではないでしょうか。

わたしたちは、暗闇の中にいると感じることもあると思います。罪とは的外れということですが。しかし暗闇の中にいるときには、的外れかどうかというレベルではありません。とにかく前が見えない。周りが見



えない。いったいどこに歩いて行ったらいいのか、まるでわからないという状態です。

そこに光が差し込んできました。神さまが救いのみ手を差し出して来られたのです。生まれつき目の見え

ない人の目が開かれたように、わたしたちは主に結ばれて光を感じます。これは2000年前に一人の人にだけ起こった出来事ではありません。

神さまはわたしたち一人一人の姿をご覧になり、目を開かせるためにどうすべきか、考えられました。そして出した結論が、イエス様の十字架と復活なのではないでしょうか。神さまの愛に包まれ、光の子として歩いて行く。それがわたしたちに求められている姿なのかもしれません。

わたしたちはなぜ教会に集い、ともに礼拝をささげているのでしょうか。それはわたしたち一人一人が神さまに結ばれているということを確信するため。そしてその喜びを、一人でも多くの人と分かち合うために、外に遣わされるのです。

最後になりますが、牧師の異動のため、福音書メッセージは今号を最後にしばらくお休みいたします。今までありがとうございました。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>